

永井路子

旅する女人



旅する女人

定価はカバーに
表示してあります

1993年3月10日 第1刷

著者 永井路子

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720028-7

文 春 文 庫

旅 する 女 人

文 藝 春 秋

旅する女人／目次

歴史に生命いのちをかけて 持統天皇

宿命への旅立ち〈筑紫へ〉……………13

紫草のかげに〈近江へ〉……………26

追わるるごとく〈飛鳥へ〉……………33

決意の日〈宮滝を発つ〉……………44

蒼き川への訣別〈峠越え〉……………50

命運を賭けて〈伊賀へ〉……………56

深沈たる瞳〈吉野へ〉……………69

あずま路のはてより 「更級日記」の著者

まだ見ぬ国への飛翔……………83

はるかなる旅……………89

物語の世界へ……………107

淡い残照のなかに……………111

旅路の終わり……………118

木曾の風雲児義仲とともに 巴御前

木曾路の青春……………127

血が命じた巴の従軍……………134

奇蹟の中の勝利……………139

木曾殿最後の落日……………148

愛の終わりの感傷旅行 「とはずがたり」の二条

数奇なる愛のなかへ……………157

愛憎のはてに……………165

東国―武士の世界……………171

めぐりあい……………179

涙せきあえず……………187

札所めぐり・母子抒情 沓掛なかり

平凡さの魅力……………203

商家の実力女性……………207

秩父への道……………214

現代に生きる札所とは？……………230

亡き子をしのびつつ……………237

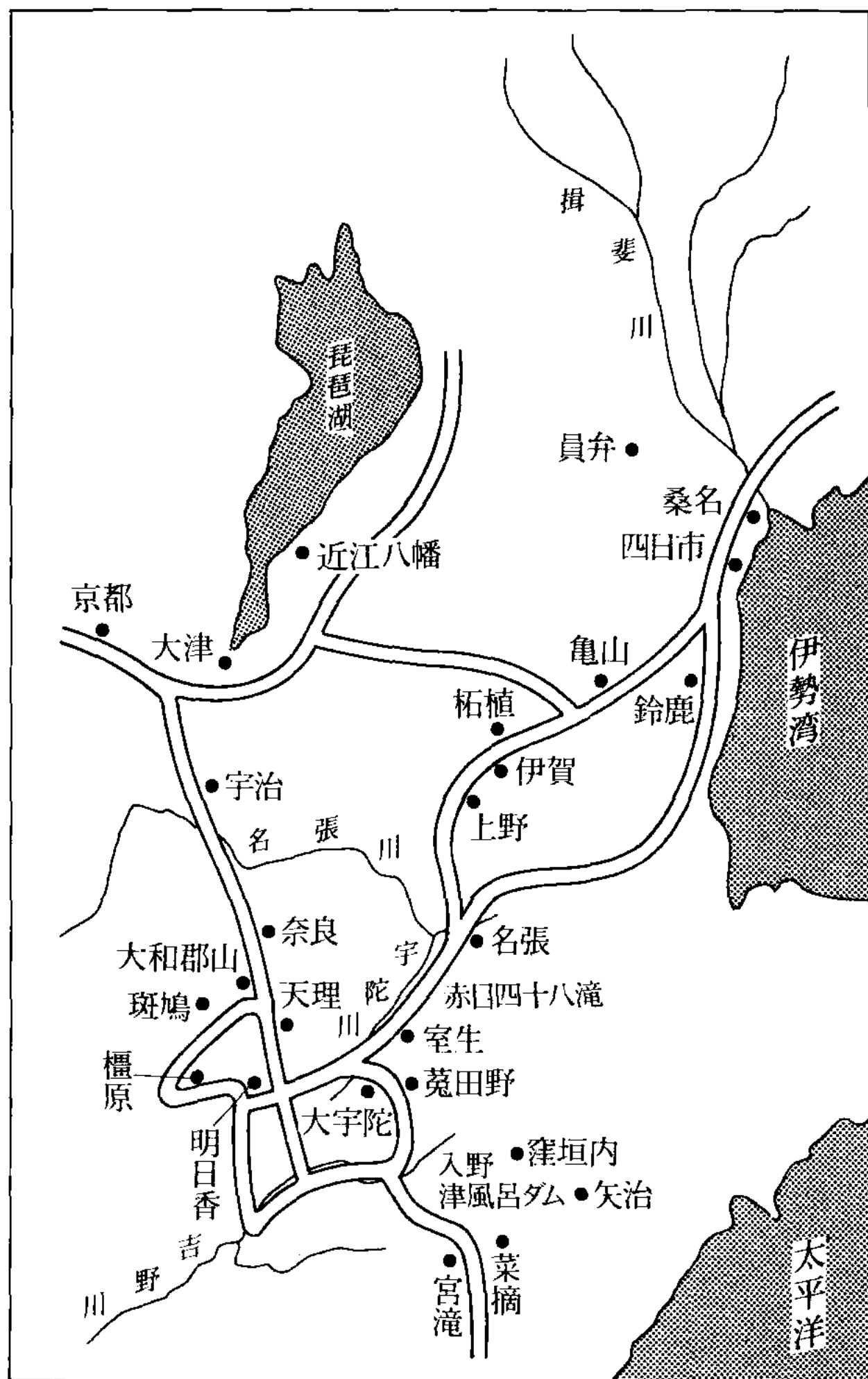
単行本あとがき……………243

文庫本あとがき……………246

旅する女人

歴史に生命いのちをかけて

持統天皇



宿命への旅立ち — 筑紫へ —

吉野は山の国であり花の国でもある。が、いま、吉野という名から、私が何よりもまず思いうかべてしまうのは、山脈やまなみの裾を流れる川のすがたなのだ。水の青とよぶにはやや硬質な、翡翠ひすいいろのその碧さあおは、山峽やまかいを流れる川ならどこでも目にできるものなのだろうが、とりわけ、ここの色が私の心を捉えて離さないのは、その色に重ねあわせて、かつてこれを眺めた一人の女性の深々とした眼差しまなざしを思い出すからかもしれない。

そのひとの名は、鷗野うのの讚良皇女さらのひめみこ、のちの持統天皇じとう——古代史の中に、他の追隨を許さない印象的な足どりを刻みつけていった女性である。

その生涯のうちに、彼女は驚くほど各地に旅をしている。飛鳥あすかから九州へ、そして近江みへ、さらに吉野へ、吉野から伊賀、伊勢へ。しかもそれぞれの旅が彼女の運命を大きく変えただけでなく、日本の歴史の変動と深くからみあっていた。

彼女が旅をすることによって、ふしぎと日本の歴史が変わってゆく、とでもいったら

いいだろうか。

とりわけ吉野への旅、そして吉野からの旅は、彼女自身にとっても命がけのものだったし、日本の歴史が始まって以来の大兵乱を生みだす旅でもあった。その記憶のなまなましきのゆえか、晩年女帝として藤原京に君臨してからも、彼女は、ほとんど狂おしいまでに吉野への旅を重ねている。

運命の星——という言葉がある。

ドラマチックな旅をしつづけた生涯にふさわしく、彼女はその誕生のときから、すでにある宿命を背負ってきたもののようである。生まれたのは六四五年、ちょうど大化改新の行なわれた年だった。もともと、宮廷で権臣蘇我入鹿^{そがのいるか}が殺されるという血なまぐさいクーデターが行なわれたそのとき、すでに彼女はこの世に生を享^うけていたのか、もしくは未だか、そのあたりのことは定かではない。いずれにしても、無心に眠り続ける嬰兒^{えい}が、その事件について何一つ知るはずもないのだが、にもかかわらず、その年の彼女の誕生は、かなり象徴的な事件だといっている。なぜなら、クーデターの中心人物、中^{なか}大兄皇子^{のおおえのみこ}は彼女の父だし、母は中大兄の片腕となつて働いた蘇我倉山田石川麻呂^{そがのくらやまだいしかわまろ}の娘、遠智^{おちのいらつめ}娘だったからだ。

祖父の石川麻呂は、このとき同じく蘇我氏でありながら、入鹿打倒の側に廻った。彼自身、入鹿らを倒して蘇我一族での主導権を握ろうという野心に燃えていたとも、中大兄側が、彼をそのかしたともいう。してみれば、事件以前に行なわれた遠智娘と中大兄の結婚は、なかなか意味深長だ。しかも中大兄に石川麻呂の娘をすすめたのは大化改新の参謀役だった中臣なかとみの（藤原）鎌足かまたりだというから、二人の結びつきは、あきらかにクーデターの下工作と見てもいいのではないかと思う。

六四五年、クーデターはみごとに成功した。そしてそれと年を同じくして遠智娘は鸕野（讃良）皇女を産む。その前にも彼女は一女（大田皇女おおたのひめみこ）をあげているが、この革命の年に生まれた皇女こそ、まさに大化改新の生んだ宿命の子といえるかもしれない。

もともとクーデターに成功しただけでは、皇女の父、中大兄は権力の座につくことはできない。その間には蘇我系の古人皇子ふるひとのみこの謀叛むほんがあったりして、中大兄の叔父にあたる軽皇子かろのみこが即位する。これが孝徳天皇だが、一応難波なにわに都を定めるものの、あちこち居を移したりして、政情は不安定を続けている。

その間、童女の鸕野がどういう生活をしていたかについてはまったく手がかりがない。ただいえることは、当時子供たちは母方で育てられたから、母の遠智娘とともに、母方の家に身をよせていたのではないかと思う。